

岩崎純一歌集		『新純星余情和歌集』>2008年の部			
歌集名読み		しんじゆんせいよせいわかしふ			
作者		岩崎純一			
通釈・語釈		園井長光、長満たき、戸井留子、武田あさゑ、イ・ギュリ、岩崎純一(自釈)			
作者サイト		http://iwasakiunichi.net/			
和歌ページトップ		http://iwasakiunichi.net/waka/			
詠進年月日 題		2008年の歌会・歌合	通釈	語釈	他歌人欄
主催: 岩崎純一	歌数:5首 歌人数:1名 自歌数:5首	『五戒和歌』(ごかいわか)			評 派生歌など
2008		仏教の「在家の五戒」を詠んだ歌である。難題だが、和歌史上に前例があり、新古今集にも採られた。 自撰			
2008/4/26	不殺生戒	さらずとも花や月だに生くものを人かさらぬかとふぞむなしき	こんなことをあえて申さずとも良からうが、春の桜や秋の月でさえ生きているものを、人間かそうでない存在か、どれが生き物でどれが死んだ物かを問うことが、事実無根で、仏教的には空し	◇「空しき」:「色即是空」	
2008/4/26	不偷盜戒	求めども尽きぬ闇路は月もなしかずむらむさきに求めやむべし	求めても求め尽きない心の闇路には月もない。霞がかかって前が見えなくなるように、掠め取って自分を見失うようになる前に、物を求めることをやめるのがよい。	◇掛詞「月×尽き」「霞む×掠む」 ◇「闇路」:仏語「長き夜の闇路に迷ふ身なりとも」(『新後撰』)	
2008/4/26	不邪淫戒	今日かけてひとり臥し所(ふしど)の敷妙の袖にさらにもあらぬ風吹く	今日という今日まで、男と関係せずに過ごした一人寝の床の女の袖に、「色んな男と関係を持つな」という、彼女にとっては守る苦勞も大したことではない当たり前前の不邪淫の戒律の風が吹	◇枕詞「敷妙の一袖」	
2008/4/28	不妄語戒	ひとたびの空を隠さむ言ひたてに幾重も足りぬあだの八重雲	一度嘘をつくと、それを隠そうとして口実を作り、結局、何重あっても足りない八重雲のように、空言を重ねることになるのだ。	◇縁語「空、隠す、幾重、八重、雲」	
2008/4/28	不こ(西に古)酒戒	我もなく酔ひ乱るるは酔はずともとより乱るる兆しあるなり	我を忘れて酒に酔いつぶれ、他人に迷惑をかける者は、酔っていないくとも、どうやら普段からその前兆のある性格をしている。		
主催: 余情会	歌数:324首 歌人数:17名 自歌数:12首	『寄花木女一字十二首 菖蒲、鳶尾、杜若』 (くわぼくによするをんないちじじふにしゆあやめ、いちはず、かきつばた)			評 派生歌など
2008/8/10 出題 2008/8/11 判		頭一字に「あやめ、いちはず、かきつばた」を置き、且つ花木に寄せて女を詠むこととされた。 出題者:長満たき・武田あさゑ 判者:長満たき・武田あさゑ			
2008/8/10	正月、寄花菜女	あらたまの年の乙女の後手(うしろで)に匂はせしなの花の綻び	まだうぶな若き女が後ろに手を回した後ろ姿に、女が匂わせた名前と共に、手の中の菜の花が匂う。	◇枕詞「あらたまの一年」 ◇掛詞「粗玉の×新玉の」「名×菜」 ◇参照「簾に添ひたる後ろ手をも」 ◇参照「髪は品好く油にしたしながら」(『五人女』) 「お富品好く払ひのけ」(歌舞伎『与話情』)	
2008/8/10	二月、寄桃女	山傍(やまび)には細かに咲ける桃の花寄れば匂へる肌の品好き	山の周りには、細やかに桃の花が咲いている。近づいてみれば匂って来るその桃の花のように品好い、女の肌である。		
2008/8/10	三月、寄桜女	目馴(めな)るれど契りは慎(つつ)む乙女子の袖に桜の一弁(ひとよ)散るまで	男というものを見慣れているが、まだ契りは慎んで交わさない五節の舞姫たちよ。女は、袖に桜の花弁が一弁散れば、契りの誘いに答えるであろうか。	◇参照「御目とまり給ひし少女の姿を思し出づ」(『源氏物語』「少女」)	
2008/8/10	四月、寄董女	いかにせむかたみに摘みし董にも乙女が心澄まぬけしきを	どうすればよいだろう。一緒にお互いに花籠に董を摘み、形見にしようとしても、摘んだ董をよそに、心がすっきりしない女の様	◇掛詞「互に×筐に×形見に」	
2008/8/10	五月、寄梔子女	花匂ひ袂の漬つるながめにももの言はで待つくちなしの色	花のように美しく控えめな様子で、袂を濡らしたまま、長雨の中もの思いに耽っている時も、くちなしの花の「口無し」のように黙って雨が止むのを待ち、恋人を待っている、女の色香である。	◇掛詞「長雨×眺め」	
2008/8/10	六月、寄朝顔女	つつめども東雲草(しのめぐさ)の色深く露秋かけぬ匂ひよそほひ	遠慮しがちな女ではあるが、朝顔のように色深く、全く秋を感じさせない朝顔に似て、全く秋を感じさせない美しさである。	◇掛詞「(露)かけぬ×(秋)かけぬ×(飽き)かけぬ」	

2008/8/11	七月、寄月草女	契りあへず夜は月草のかれゆきて別れに薫る花の面影	朧長い約束を交わし損ねて、夜の逢瀬は尽き、月草が枯れるように離れていって、別れ際に薫った女の面影が残るばかりである。	◇掛詞「月×尽き」「枯れ×離れ」 ◇参照「夜もすがら重ねし袖は白露のよそにぞうつる月草の花」(家)		
2008/8/11	八月、寄葛女	かきくらす乙女が里に風過ぎて葛の裏葉に散れる白露	心が沈んで暮らす女の里に風が通過ぎて、葛の葉の裏側にまで露が散り、涙も散り、その裏葉の白色に染まっている。	◇参照「葛の裏葉の霜枯るまで」(『玉葉』)		
2008/8/11	九月、寄薄女	霧しぐれしのに携へる花すすき頬より袖に落つる白玉	時雨のような霧に、しんみりと携う花薄。その花薄のような女の顔から袖に落ちて、涙の白玉。	◇枕詞「花薄→頬」		
2008/8/11	十月、寄紅葉女	月とほる夜半のもみぢ葉赤らひく肌に染む露湿る秋風	月の光が通ってしまうような夜半の紅葉の葉が、月の光でさらに赤味を増し、女の肌も月の光が連れてくる紅葉の色と重なって赤味が増し、露が染み込む。それに湿り気を増す秋風である。	◇序詞「～もみぢ葉」 ◇参照「赤らひく肌も触れずて」(『万葉』)		
2008/8/11	十一月、寄笹女	初雪の斑に置ける笹の葉の緑ささらぐ艶の黒髪	初雪がはらはらとまだらに散り落ちて、笹の葉の緑のように、さらさらとしている黒い「緑の髪」である。	◇序詞「～笹の葉の」 ◇縁語「笹、葉、緑、さらぐ」		
2008/8/11	十二月、寄松女	立ち返り心の雪を松が実の上の空なる髪の下風	繰り返して、心ゆくまで雪を待っている女。その目の前の松の実のような、恋人を待つ身の上の中、うわの空である女の黒髪を風が吹き抜ける。	◇掛詞「雪×(心の)ゆき」「松×待つ」「実×身」「身の上×うわの空」		
主催: 余情会	歌数:612首 歌人数:28名 自歌数:12首	『寄風月女心十二首』 (ふうげつによするをんなごころじふにしゆ)				
2008/8/12	即詠	風月に寄せて女の心を詠むこととされた。 出題者:武田あさゑ 衆議判			評	派生歌など
2008/8/12	正月、霞	冬を経てなほも頼みの朝霞八重にあゆるは露の衣手	冬が過ぎて、やはり恋人が来てくれる頼みは浅く、初春の朝霞が立ち始めた。幾重にも重なる霞に似て、重ねてこぼれるものと言えば、私の着物の袖の涙。	◇掛詞「朝×浅」「肖ゆる×落ゆる」		
2008/8/12	二月、曙	あけぼのの空は春なる夢の末うつつの床を暗す白雲	明け方の空は、春めいて晴れているようだ。そう思ったのも束の間、その夢は覚めて、現実の悲しい寝床を白雲の影が曇らせて小さな人里であなただと過ごし、黙りこくった朝の見送りの時、玄関先には花びらが一枚落ちておりました。そんな儂い一夜を惜しんだ。夢のような通路でした。	◇掛詞「春×晴る」 ◇対句「晴る、夢//暗らす、うつ」 ◇掛詞「一弁×一夜」 ◇参照「いくそたび君がしじまにまけぬらむ」(『源氏物語』「末摘花」)		
2008/8/12	三月、花	朝戸出の里のしじまに見る花の一弁ををしむ夢の通ひ路	「君を忘れないよ」と言われたことを遠い未来の果てまで引き連れて、夏草の緑色のように深く恋し続ける私ですよ。	◇序詞「～緑の」 ◇枕詞「夏草の→深く」		
2008/8/12	四月、夏草	忘れじの遠き果てまで夏草の緑の深く恋ひわたるかな	五月雨よ。雨のあなたと私の涙でしほり濡れる私の袖に残る桜の香りを、どこの晴れた別世界の花に映じさせ、移し替えて、消してしまおうとするのですか。	◇掛詞「映さむ×移さむ」		
2008/8/12	五月、五月雨	五月雨やしほほに濡るる袖の香をいつこの晴るる花にうつさむ	恋し始めた私は、雲の隙間もない夕立のように泣き、やまない夕立の雨のように、どうにもやむを得ずうわの空の気持ちでございませう。	◇掛詞「(夕立の雨が×恋が)やむにやまれぬ」「空×(うわの)空」 ◇縁語「夕立、雲間、やむ、上」 ◇参照「涙の、水茎の先に立つ心地して」(『源氏物語』「夕霧」)		
2008/8/12	六月、夕立	夕立の恋ひそめし身の雲間なくやむにやまれぬ上の空かな	深い草の野原をかき分けてあの人に来てくれず、ただ私からの手紙だけが、身に染みる秋風に乗って通っていく光景が、つら月を見ては、いつも化粧直しをして、心も整えて、あの人を待つからと言って、やはり一緒に床に入るのが月影であることに変わりはなかった。	◇参照「色直しの杯(床杯)」		
2008/8/12	七月、秋風	つれなくて身に染む野辺の深草に水茎ばかりかよふ秋風	自然と恋心のために赤面してしまいますが、徒歩でゆっくり進んでいると、道の紅葉の色にうまく紛れることです。	◇「徒歩(かち)」:「徒歩で山へ登りました」(『片恋』二葉亭四迷、原作『アーシャ』ツルゲーネフ)		
2008/8/12	八月、月	月見れば心も色を直すとてさても片敷く影はかはらず	あの人がいなくなって霜枯れた寝床。言葉ばかりのあの人のように、霜の表面ばかりを風が吹く。霜が解けないように、私の奥に秘めた恋の呪縛もまだ解けない。	◇「奥」:「玉くしげ奥に思ふを」(『万葉』)		
2008/8/12	九月、紅葉	おのづから色に出づれど徒歩(かち)ながら我が身紛る路のみぢ葉	あなたと枕を交わすことになるものと思っていましたが、寒い庭の上で、私は枕の薄氷と契りを交わしました。氷が、ゆっくり解けきらないうちに砕け果てるように、あなたとの約束は、私の着物の帯が解けないうちに砕け果てるでしょう。	◇参照「床の霜枕の氷消えわびぬ結びもおかぬ人の契りに」(定家)		
2008/8/12	十月、霜	霜枯れし床の上風面ばかり吹くともとけぬ奥の恋かな				
2008/8/12	十一月、氷	さむしろの枕に交はず薄氷とけあへぬ間にくだけ果てなん				

2008/8/12	十二月、雪	もの深き雪の寒さに恋閉ぢて埋み火(うづみび)果つる粉炭のもと	重く深い雪の寒さに、私たち二人の恋も終幕して、囲炉裏に埋めた粉々の炭火の奥に果てた。	◇本歌取「かすみあへずなほ降る雪に」(定家)		
主催: 余情会	歌数:350首 歌人数:15名 自歌数:10首	『女髪十首』(めがみじつしゆ)				
2008/8/13	即詠	女の髪を十通りに詠むこととされた。 出題者:戸井留子・長満たき 衆議判・投票			評	派生歌など
2008/8/13	朝寝髪	敷妙の枕に薫る朝寝髪面も散る日も同じかかやき	寝床の枕に広がって薫っている、朝の寝起きの女の髪。乱れ髪を恥ずかしがる赤面も、照り始めた朝日も、同じ輝きである。	◇枕詞「敷妙の一枕」 ◇掛詞「かかやき(恥ずかしがり×光)」 ◇参照「朝寝髪掻きも梳らず」(『万葉』)		
2008/8/13	散髪	玉の緒の長き黒髪たなびきて空にかけた露の浮橋	女の長い黒髪がたなびき、女の流す涙を空に掛け散らしている。黒髪は、涙の往来のために空に架け渡した橋のようである。	◇枕詞「玉の緒の一長き」 ◇掛詞「掛け×架け」 ◇縁語「玉の緒、長し、露、かく」「長し、黒髪、たなびく、かく」「かく、		
2008/8/13	洗髪	危ふさをよそに洗(す)ませど梳くからにさらさら返る髪の匂ひ香	「恋しく思えても、よろしくない女ではなかるうか」という我が心配をよそに、女は髪を洗って済ませたが、くしけずってみた途端、やはり元通り、髪が良い香りでさらさらした、美しい女であった。	◇参照「恋しくも、また、見劣りやせむとさすがに危ふし」(『源氏物語』「若紫」) 「御髪など洗ましつろはせて」(『源氏物語』「総角」) ◇掛詞「さらさら×さら返る」		
2008/8/13	柳髪	春風も霞む匂ひの柳髪たなびき渡る桃の花まで	春風も霞ませる香気のある柳髪が、向こうに咲いている桃の花までたなびき渡るようだ。	◇参照「春風や柳の髪をけづらむ緑のまゆも乱るばかりに」(『新千		
2008/8/13	束髪	手のうちになほ色の添ふ東ね髪薄きけはひによそふべき艶(つや)	女の手のうちにあつて、なお色香を増す東ね髪は、薄化粧の顔に花を添える艶である。			
2008/8/13	襟髪	揺るぎつつおよびのひまを漏る髪のひとすぢに寄る細き月影	ゆらゆら揺れながら女の指のすき間を漏れる髪のひとすぢに寄せる、細い月影。	◇参照「かきやりしその黒髪のすぢごとに」(定家)		
2008/8/13	木葉髪	落ち積みしもみぢに混じる木の葉髪こひぢの先のしるべなるらん	晩秋のぬかるみに落ち積もった紅葉の葉に混じる女の抜け髪は、女の恋路の行く末を示す印として、女が落としたのだろうか。	◇参照「木の葉髪文芸ながく敷きぬ」中村草田男 ◇掛詞「恋路×泥」 ◇縁語「落つ、積む、もみぢ、木の葉、こひぢ」		
2008/8/13	濡髪	心までしのにそぼつ濡れ髪の露の薫りに湿る秋風	心までしっとり潤いそうな女の濡れ髪。髪の上の露や涙の薫りに湿る秋風である。	◇参照「身もそぼつまで深き泥」(『源氏物語』「葵」)		
2008/8/13	乱髪	ぬばたまの髪のみみだれしくしくに流れぞうつる彩のかなしさ	五月雨の降る中、女はしくしくと泣き続け、乱れた黒髪を流れる涙の描く模様の移ろいが哀しい。	◇枕詞「ぬばたまの一髪」 ◇掛詞「五月雨×さ乱れ」「しくしく×頻く頻く」 ◇参照「ぬばたまの黒髪山の山菅に小雨降りしき頻く頻く思ほゆ」(『万		
2008/8/13	解髪	解き果てて夜風を項(うな)ぐ黒髪に影を慎(つつ)める月の霜かな	解き終えて、夜風を項に掛けたようにまっすぐな女の黒髪の上に、少しは宿るも、慎んで照りきららない、霜のような月の光である。	◇慣用「月の霜」:「こよひかく眺むる袖の露けきは月の霜をや秋と見つらむ」(『後撰』)		
主催: 余情会	歌数:70首 歌人数:10名 自歌数:14首	『如来七首、菩薩七首』(によらいななしゆ ぼさつななしゆ)				
2008/8/14 2008/8/18	出題 判	如来・菩薩各七首ずつの釈教歌を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 判者:岩崎純一			評	派生歌など
2008/8/14	釈迦如来	斯(か)くばかり如来数多(あまた)を訝(いぶか)れる身には釈迦なほゆかしがらる	これほど如来が多くおわす現状について、本当に皆が皆仏法を悟りきった如来なのかと疑っている我が身にとっては、やはり仏教の原典たる釈迦如来に心惹かれるのである。	◇参照「三千大千世界」(『阿弥陀經』)		

2008/8/14	阿弥陀如来	恒河沙(ごうがしゃ)の仏寄る身の阿弥陀にはやはか十八番(おはこ)と其(そ)に驕るまじ	多くの大乘經典に登場し、西方のガンジス河のように遥か西方の浄土におわし、ガンジス河の砂の数ほどの仏から頼りにされている阿弥陀如来におかれては、まさか、ご自身の本願たる第十八願のように、「周りから頼りにされることは私の十八番である」、などと驕ることはないのである。人から頼りにされることを驕る者は、仏道の逸脱者である。	◇参照 「三千大千世界」(『阿弥陀経』) ◇仏語 「恒河砂、十八番」		
2008/8/14	薬師如来	東雲の明るる茜を愛(め)づる身を瑠璃の光やいかに照らさむ	薬師如来のおわす東方浄瑠璃世界の方角より明けてくる曙の茜色を愛でる我が身を、蒼き色である瑠璃光の恩恵はどのように照らすであらうか。	◇参照 「東方浄瑠璃世界」(『薬師経』) ◇対句 「茜//瑠璃」		
2008/8/14	阿しゆく(門に人三つ)如来	尊しな見えしらがはめ阿しゆく仏うつつの空は東より明るるものを	尊いことよ。あえて人目に目立つようには行動なさらず、金剛界曼荼羅の東方におわす阿しゆく仏は。現実の空でさえ、東から明るく目立って明けてくるというのに。	◇参照 「金剛界曼荼羅、五智如来」		
2008/8/14	毘盧遮那如来	法身(ほっしん)のまことを知りし毘盧遮那の(やまとうた)をこそ聞かまほしけれ	法身の真理を知り給う毘盧遮那仏は、真の和歌の道をも知り給うはずだから、毘盧遮那仏のお楽しみになる和歌を拝聴したいものだ。	◇参照 『華嚴経』		
2008/8/14	大日如来	密(みそか)かなる五智の仏の直中(ただなか)の所替(ところか)はらず精進あらせたまへ	大日如来は、密教の金剛界曼荼羅の五智如来の配置において、中心に座しておられる。周囲の四如来に所領を転封されることのないよう、永遠に如来道に精進していただきたい。	◇参照 「金剛界曼荼羅、五智如来」 ◇参照 「所替へ」		
2008/8/14	普賢王如来	大日の後(のち)に与(あづか)る法身普賢先の釈迦をばかけて忘れじ	大日如来ののちに大日如来を超越する本初仏として大悟された法身普賢仏よ。それほど存在なら、実在の人間で、我々の先達でもある釈迦の重要性を、少しもお忘れにならないだろう。	◇参照 『大日経』『理趣経』		
2008/8/18	弥勒菩薩	弥勒菩薩序(ついで)と言えど逸(はや)るやは次(すが)ひ次(すが)ひに追へる菩薩に	何十億年後かに、釈迦の次に仏陀となることが決定している弥勒菩薩と言えど、大層焦っているのではないか。次々と仏道修行を成し遂げて後ろから追いついてくる菩薩たちの存在に。	◇参照 『弥勒三部経』『無量寿経』		
2008/8/18	観音菩薩	観音の大慈大悲(だいじだいひ)の水瓶(すいびやう)のわけて悟ると言ふぞむなしき	格好だけつけて寺に参り、大慈大悲をお持ちの観音様の前に行き、観音様の持物である闍伽の入った水瓶を真似して無理に仏具を持つなどして、「私は悟った」などと言っても、水瓶が割れるように空しいことである。	◇掛詞 「割れて×破れて(強いて)」 ◇序詞 「～水瓶の」 ◇仏語 「大慈大悲、水瓶」		
2008/8/18	勢至菩薩	悪を離(か)れ衆生の智慧を起こしつつ阿弥陀の脇に合はす掌(たな)手弱女(たをやめ)の依怙(えこ)の験(しるし)にその侘ぶる心をも身をも象の白めよ	悪の心を放ち去り、衆生の知恵を起こさせながら、阿弥陀仏の脇に掌を合わせて凜と座しておられる勢至菩薩よ。	◇参照 『観無量寿経』		
2008/8/18	普賢菩薩	空の色の智慧に輝く青蓮華(しやうれんげ)剣(けん)の直路(ただ)を獅子ぞふみゆく	女人成仏の捩り所として女性から頼りにされるのだから、その女性への霊験として、悲観の境にある女性の心をも身をも、あなたが結跏趺坐し給う六牙の白象のように、白くしてあげ給え	◇参照 『法華経』		
2008/8/18	文殊菩薩	道々に童(わらは)べ守る地蔵様はねぎる足の音の果てまで	色々な道端で、子どもたちを、そのはしやぎ回る足音の果ての果てに至るまで、守っておられるお地蔵様。	◇参照 『維摩経』『文殊師利般涅槃経』		
2008/8/18	虚空蔵菩薩	智慧受けし十三参り(じふさんまゐり)の童べの後ろを送る顔の打	自らの知恵を受けた十三参りの子どもたちの後ろ姿を見送る、虚空蔵菩薩の顔の微笑み。	◇「十三参り」:京都嵐山の法輪寺		
主催: 余情会	歌数:120首 歌人数:10名 自歌数:12首	『着物十二首 新暦』(きものじふにしゆ しんれき)				
2008/8/20 2008/8/24	出題 判	新暦十二か月を着物の文様に寄せて詠み、結句は旧暦の月の異称で結ぶこととされた。 出題者:長満たき・武田あさゑ 衆議判			評	派生歌など
2008/8/20	正月、松竹梅	纏ひたる松竹梅(まつたけうめ)の色に似て髪も気色も匂ふ初月(はつつき)	その身に纏っている松竹梅の模様のごとく、女の髪にも佇まいにも色香が見える一月である。	◇「歳寒三友」		
2008/8/20	二月、椿	椿咲く身頃を雪の滑りつつ裾より下の寒き如月	椿が見頃で、着物の身頃にも咲いている椿の模様の上を雪が滑り落ちる二月、裾より下に見える女の足先が寒い。	◇掛詞 「身頃×見頃」		

2008/8/20	三月、蝶	春の空に飛ばぬ胡蝶(こてふ)の袖振りて移り香ばかり散れる花月(はなづき)	現実には飛ばない蝶の描かれた袖を、女が蝶の羽のように振り、女と桜の移り香が春の空に散るばかりの、妖艶な三月である。	◇掛詞 「散れる花×花月」		
2008/8/20	四月、藤	麗(うるは)しき肌理(きめ)の艶(つや)なる藤の頃などか名に負ふ花名残月(はななごりづき)	美麗なきめの細かさを持つ藤の花が咲き、女の艶も麗しき四月の今日この頃。四月にはなぜ、散った桜のなごりの月(「花名残月」)という名が付いているのかと思う。	◇参照 「おのづから肌理細かに、つまはづれ麗しく」(『一代女』西鶴)		
2008/8/22	五月、菖蒲	顔佳花(かほよばな)衣(きぬ)は菖蒲(あやめ)か杜若(かきつばた)肌(はだ)白妙に舞ふ吹雪月	五月に、美しい女性に似合うものは、菖蒲か杜若の着物だろう。あるいは、吹雪のように白い卵の花の着物だろう。	◇参照 「十八、九なる顔佳花」(『曾根崎心中』近松) 「顔佳花とも申すやらん」(謡曲『杜』)		
2008/8/22	六月、百合	風薫りひとへにうつる百合の花にうら寂しくも雨の水無月	夏の風が薫り、恋人と重ねてきた二重の着物から、一重の百合の花の模様の薄着に衣替する女に、まだうら寂しい梅雨の雨と涙が落ちる六月。	◇参照 「夏の野の繁みに咲ける姫百合の知らえぬ恋は苦しきものぞ」(大伴坂上郎女『万葉』)		
2008/8/22	七月、流水	薄衣を濡れて流る水も狭(せ)に移り香落ゆる色の文月(ふみづき)	現実の七月の暑さのように濡れ果てて流れない、薄物の着物に描かれた流水の文様。その一面に流れて染みてゆくものは、着物を纏う女の移り香である。	◇参照 「かの脱ぎすべしたると見ゆる薄衣」(『源氏物語』「空蟬」)		
2008/8/22	八月、秋七草	和膚(にきはだ)に秋の七草影映し衣より白く照る桂月	白い月光が、白い着物に描かれた秋の七草の模様を、内なる女の白い柔肌に透過させ映じさせて、もはや着物よりも白い影となっている八月よ。	◇縁語 「影、白し、照る、桂、月」 ◇参照 「たなづく和膚すらを」(『万葉』)		
2008/8/24	九月、月見	月影の枉を指の迎るほど空より色をうばふ長月	九月、月影の宿る着物の枉を女の指が迎るに従って、月影は、己である空の月の美を奪い取り、女の指の色香を照らすのである。	◇参照 「しばし待てまだ夜はふかし長月の有明の月は人まどふなり」(藤原惟成『新古今』)		
2008/8/24	十月、菊	色も香も湛(たた)へる菊の花の咲く名残りの袖をふる時雨月	十月、色香を湛えた菊の花が時雨れに濡れる。女は、菊の花の模様をあしらった着物をまとい、色香を湛えている。別れ際、名残惜しく涙する女の振る袖に、時雨と涙は降り続く。	◇参照 「名残の袖をふりきり、さて去なうずよなう」(『閑吟集』)		
2008/8/24	十一月、紅葉	色々の紅葉の衣に吹き寄せて折まで紐をむすぶ霜月	色とりどりの紅葉の葉の吹き寄せの模様の着物に、現実の晩秋十一月の木枯らしに乗って紅葉の葉が吹き寄せる。やがて霜も結び始めた。女の着物の帯は、その時を待ってまだ結んだ着物の身八つ口のあたりは、花ならぬ薫り、女の色香に染まっている。雪を含んで吹いてくる白い風も、身八つ口に吹き込むべきか否かを迷いたためらい、雪の吹き溜まりを作っている、十二	◇参照 「吹き寄する風のおとなひも面白う」(『狭衣物語』)		
2008/8/24	十二月、雪	花ならぬ薫りに染める八つ口に風さへ白くまよふ雪月	着物の身八つ口のあたりは、花ならぬ薫り、女の色香に染まっている。雪を含んで吹いてくる白い風も、身八つ口に吹き込むべきか否かを迷いたためらい、雪の吹き溜まりを作っている、十二	◇参照 「同じく鶺鴒色の覗く八つ口へ白い両手を突込んで佇つてみた。」(岡本かの子『小町の芍薬』)		
主催: 余情会	歌数:2680首 歌人数:56名 (うち完詠6名) 自歌数:84首	『詠花鳥風月和歌八十四首 花二十四首、鳥二十四首、風月三十六首』 (えいくわてうふうげつわかにはちじふよんしゆ はなにじふよんしゆ、とりにじふよんしゆ、ふうげつさんじふろくしゆ)			評	派生歌など
2008/9/1 出題 2008/9/28 判		春夏秋冬の花鳥風月を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 衆議判				
2008/9/1	正月、梅	梅が香の軒より袖に続きつ夢まで霞む春の夜の空	梅の香りが戸外の軒のほうから寝室内の我が袖にまで漂い続き、夢に見る空まで香りで霞んでいる、春の夜である。	◇参照 「軒近き梅の梢に風過ぎて匂ひにさむる春の夜の夢」(良経)		
2008/9/1	正月、椿	月影を重ねる椿つらつらにひとよひとよを見とも飽かめや	月影を重ねて映す椿の花びらの美しさは、つくづく、一枚一枚見るごとに飽きない。この女性の美しさは、一夜一夜眺めるごとに飽きない。	◇参照 「河のへのつらつら椿つらつらに」(『万葉』) ◇掛詞 「一弁一弁×一夜一夜」		
2008/9/2	二月、桃	なりぬべき毛桃の実をばちぎるとて今花のみを懐かしむかな	今は、生っている毛桃の実をもぎ取る中、花の咲いていた頃を懐かしむことだ。女の身と契ったのちには、契る前の花のような時間が懐かしいものだ。	◇掛詞 「実×身」「干切る×契る」 ◇縁語 「生る、毛桃、実、ちぎる、花」 ◇参照 「はしきやし、吾家(わぎへ)の毛桃、本(もと)しげみ、花のみ咲」		
2008/9/2	二月、桜	吹きまよふ下風花の香に染みて枝をかれゆく天の羽衣	吹きすさぶ風は桜の香りに染み、散る桜は、枝に掛けておいた天女の羽衣が飛んでゆく光景のようだ。	◇参照 「羽衣伝説」 「ワルキューレ」(北欧神話) 「山高み岩根の桜散る時は天の羽衣なつるとぞ見る」(崇徳院『新古	◆枝を離れた瞬間の花の群れに天人のかるやかな白衣を幻視(水垣久)	

2008/9/3	三月、菫	宿からむ野辺の菫のかたはらに すみあへぬ世の床のすさびに	野原の美しい菫のそばに宿を借りよう。あの女と結婚できない 運命の我が床の慰めとして。	◇掛詞「世×夜」 ◇参照「春の野にすみれ摘みにと 来しわれそ、野を懐かしみ一夜(ひと よ)寝にける」(『万葉』)		
2008/9/3	三月、藤	名のままに藤の花房吹き散りて夢 に夢見るむらさきの雲	「ふ(き)ち(る)」という名の由来の通りに、目の前の藤の花の房 は風に吹き散り、夢にまで見た極楽の雲のようだ。	◇参照「紫の雲とぞ見ゆる藤の 花」(『拾遺』)		
2008/9/4	四月、杜若	搔きつけし髪のおさまなる杜若にほ ひぞあゆる野辺の遠近	櫛でなでつけた髪のような杜若の色香が、野辺一面ににじみこ ぼれている。	◇参照「草枕ねくたれ髪を搔きつ けし」(『続詞花』)		
2008/9/4	四月、卯花	白妙のとけぬ雪てふ卯の花も冬と かたみにうつるをりふし	真っ白な雪のような卯の花。解けないその雪の姿と、まだ見ぬ 冬の幻の雪の姿とが、脳裏を行き来し、年月は巡る。	◇参照「をりふしの移りかはるこ そ、ものごとにあはれなれ」(『徒然 草』)		
2008/9/5	五月、紫陽花	下葉より蛍のぼする光にやよひら の色を添ふるあぢさゐ	古歌には、「紫陽花の下葉に集まった蛍の光が、新たに添えら れた紫陽花の花びらのようだ」と読まれているが、元より、蛍の 添えられたその紫陽花そのものが、下葉から蛍が立ち上らせた 幻想の光ではないだろうか。	◇本歌取「あぢさゐの下葉にすだ く蛍をばよひらの数の添ふかとぞ見 る」(定家)		
2008/9/5	五月、桔梗	夏の野はまだきちかうもあらずと て指を花の影と待たるる	野原には、早くも夏が来るというわけではなく、まだ桔梗も咲い ていない。桔梗の形に似た我が手の指を眺めつつ、夏は待た れる。	◇物の名・掛詞「まだ・きちかう× まだき・近う」 ◇参照「秋ちかう野はなりにけり白 露のおける草葉も色かはりゆく」(紀 貫之)		
2008/9/6	六月、撫子	撫子のとこなつかしく咲く花を我の み陰に入りて見るかな	夏の炎天下でいつも魅力的な様子で咲く撫子の花を、私のみ 日陰に入って、遠くから眺めることだ。撫子の花のように魅力的 な女を、未だ物陰からしか見る勇気のないことだ。	◇掛詞「常夏×とこなつかしく」 ◇参照「撫子のとこなつかしき色 を見ば」(『源氏物語』「常夏」)		
2008/9/6	六月、朝顔	まだあけぬ朝顔だにも色に出でて 我が身赫(かかや)く心地こそすれ	まだ夜が明けないうちの朝顔さえ綺麗な色香を見せるので、ま るで朝の寝床の我が身を見るように照れくさい。	◇掛詞「朝顔(の花)×(私の)朝 顔」 ◇参照「御さまのいとばつかしげ なるに、わが朝顔の思ひしらるれ 」(『古今』)		
2008/9/7	七月、浜木綿	幾重ともいざ白波を越ゆる風吹く 秋の音の底の浜木綿	幾重とも分らず、畳みかけるように白波の上を越えて吹いてく る風。畳みかけるようなあなたの別れの言葉の中、秋らしい風 の音の底に咲く、浜木綿の花。	◇掛詞「白×知ら」「秋×飽き」 ◇参照「我も思ふうらの浜木綿いく へかはかさねて人をかつ頼めとも」 (定家)		
2008/9/7	七月、女郎花	あはれなり宿りもさせぬ女郎花す ぎゆく袖に香だにうつせよ	愛しいものだ。私を隣に泊まらせてくれない女郎花の花よ。美し い花の貴女に浮気をせず、ただ通り過ぎて、愛する女の元に 帰ってゆく我が袖に、香りだけでも移してくれよ。	◇本歌取「女郎花多かる野辺に宿 りせば」(『古今』)		
2008/9/8	八月、萩	いにしへも万(よろづ)にかけてな がめども露も飽かぬは秋萩の花	いにしへの日本でも、何かにつけて眺め、『万葉集』では最も多 く詠まれた花だが、少しも飽きないのは、秋の露に濡れた萩の	◇掛詞「万(様々×『万葉集』)」 「露×露も(少しも)」		
2008/9/8	八月、竜胆	入相(いりあひ)のよそにつれなき 秋の音のつきせぬ鐘のりうたむの 花	恋人どうしの出合いを告げる入相の現実の鐘の音は、あなたに 飽きられた私の身には鳴らず、鐘の形に似た竜胆の花だけが、 撞かれずに咲いている。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇参照「りんだうは枝ざしなどもむ つかしけれど、こと花どものみな霜 枯れたるに」(『枕草子』「草の花」)		
2008/9/9	九月、尾花	旅の空月に重なる花すき幾袖 (いくそで)かけて光る露かな	旅の途中、空の月に重なるススキの穂の光景を見た。我が袖 がススキの野原をかき分けてここまで来ただけの露と共に光る ものは、我が涙である。	◇掛詞「かけて(掛けて×に渡つ て)」 ◇参照「秋の野の草のたもとか花 すすき」(『古今』)	◆広大な薄野原を旅 してゆく人の見た光 景 「月に重なる」には旅 の長さも暗示 ◆「幾袖かけて」は薄 の穂を袖に譬えた古 歌の趣向を借りた表 現 ◆薄野原の幻想的な	
2008/9/9	九月、藤袴	今はただ数も露なる藤袴あはれに かへてかかる夕霧	今はもう、あまり見なくなった藤袴に、残り少ない露がかかって いる。露の美的情趣に代わってかかりゆくものは、藤袴を隠す	◇掛詞「露×つゆ(少し)」 ◇縁語「露、かかる」		

2008/9/10	十月、菊	菊の花色々咲けばをりふしの空より寄れる月かと思ふ	様々な色に咲いている菊の花を見ると、四季折々の空より宿り来た月の球かと思う。	◇参照 「うすくこくつろふ菊の籬かなこれも千草の花とみるまで」(頓阿)	◆白、黄、淡紅、濃紅、紫と、菊ほど多彩な花はない ◆そのさまざまな色を、折々の色に染まる空の月になぞらえた一首 ◆月になぞらえたところがユニーク	
2008/9/10	十月、石菖	石菖(つばき)や花もあはれに艶なして葉の間も清き冬の夕暮	石菖は、さすがは「艶葉菖」の転訛であるように、花は艶があり、葉の間にまで清らかに満ち満ちて、冬の夕暮れにふさわし	◇参照 「庭を見ることも稀なり石菖(つば)の花」(高浜虚子)		
2008/9/11	十一月、山茶花	赤らひく肌や冬をば告ぐるかな色ぐはし子に似たる山茶花	赤く染まった山茶花の花びらの様子が冬を告げる。かじかんで赤くなった、女の精妙な肌のように。	◇枕詞 「赤らひく一色ぐはし子」 ◇参照 「髪をすく汝がゆびさきのうす赤みおびて冬きぬさざん花の咲く」(前田夕暮)		
2008/9/11	十一月、寒椿	おしなべて散るやはあらぬ寒椿ひとよごとにはなほ惜しければ	寒椿よ、あまねく散ってしまえばよいものを。一弁一弁ごとに散るのは、いっそうつらく感じられる。恋の逢瀬よ、あまねく散るのだ。一夜一夜ごとに散ってくれるなよ。	◇掛詞 「一弁×一夜」 ◇対句 「おしなべて×ひとよごと」 ◇参照 「寒椿つひに一日の懐手」(石田波郷)	◆王朝風の婉曲な詞遣いが、必要以上に難解さを齎しているのではないかと懸念 ◆花に寄せるもどかしいような、じれったいような思いはかえってよく表し得てい	◆ことならばおしなべて散れ寒椿ひとよごとにはなほ惜しければ(水垣久)
2008/9/12	十二月、水仙	あしびきの山人の背の長き葉の色うはしき水仙の花	山に籠もる仙人の背中のように長い葉の色が美しい、水仙の花である。	◇枕詞 「あしびきの一山」 ◇序詞 「あしびきの～長き葉の」 ◇参照 「ふりかくす雪うちはらひ仙人の名もかぐはしき花を見るかな」(千種有功)		
2008/9/12	十二月、蠟梅	冬深く花をさびしめ蠟梅の色尽くしてぞ咲きや渡らむ	あまりの冬の深さで、他に咲いている花が少ないために、蠟梅はかようにも我が色香を一面に咲き尽しているのであろうか。	◇参照 「臘梅の老いさびし香のほのほのとわが枕べを清くあらしむ」(窪田空穂)		
2008/9/13	正月、鶯	春は来ぬ声のみ風のつれそめて霞の奥を渡るうぐひす	春は訪れた。風が鳴き声を連れてくるばかりで、姿は見えず、霞の奥を飛んでいる鶯。	◇参照 「春の野に霞たなびきうら悲しこの夕影にうぐひす鳴くも」(家)		
2008/9/13	正月、鶯	降る雨も照る日も負ひて鳴く鶯の互に恋ふる声のかなしさ	降る雨も照る日の光も背負うように鳴き続ける鶯の雌雄の、互いに恋を伝え合う鳴き声のかわいらしさ。	◇参照 「鶯の声聞きそめてより山路かな」(浜式之)		
2008/9/14	二月、雲雀	木々近き焼け野をよそに雲雀のみ雲居をあがる夕暮れの声	近くに多くの木々がある夕暮れの焼野の様子をよそに、雲雀ばかりが空高く羽ばたき上がり、鳴いている情趣よ。	◇参照 「うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しも独し思へば」(家)		
2008/9/14	二月、雉	妻恋ひの雉子(きぎす)の心かくしあへず尾の上の風の声のさやけさ	山の奥で鳴いて妻を求める雉の恋心は、隠しきれずに溢れ、峰に吹き雉の尾の上に吹く風も、雉の鳴き声も、澄み渡っている。	◇掛詞 「(雉の)尾×尾の上」 ◇参照 「夫人は身を潜めて、雉の伏隠れた風情であった」(『白鷺』) 「あしひきの片山雉立ち行かむ君に後れてうつしけめやも」(『万葉』)		
2008/9/15	三月、燕	とだへせし夢かうつつの朝戸出に声さやけくも燕鳴くなり	朝、ぱたりと途絶えてしまった夢。夢うつつの状態のまま、戸外に出ると、澄みきった声で燕が鳴いている。	◇参照 「燕来る時になりぬと雁がねは国偲ひつつ雲隠り鳴く」(家持)		
2008/9/15	三月、頬白	春あかね羽も色染む頬白の雪を残して鳴ける黄昏	春の夕暮れ時の空の茜色に羽を染められて、頬白が鳴く。雪のような頬だけが白く染め残されている。	◇対句 「羽、茜//頬、白」		
2008/9/16	四月、山鳥	山鳥のひとりぬる夜の尾の裾に玉ぬきみだる床の雨垂り	夜、一羽だけで眠っている山鳥の尾の先に、美しい宝石を散りばめたような雨垂れと山鳥の涙が落ちる。一人寝する女の寝巻の裾に、涙がきらめき落ちる。	◇本歌取 「ひとりぬる山鳥の尾のしだり尾に霜おきまよふ床の月影」(定家)		
2008/9/16	四月、時鳥	時鳥卵の花だにもこむる夜に人知れぬ間の忍び音の色	真っ白な卵の花さえも閉じ込めてしまうほどの宵闇の中で、人が寝静まっている間に、女が忍んで涙し、ほととぎすの初音も聞こえる美しさよ。	◇参照 「なきぬとも人にかたらし時鳥ただ忍び音はわれに聞かせよ」(『続古今』)		

2008/9/17	五月、水鶏	あなたより水鶏(くひな)ぞたく柴の戸にいかへり散る声の面影	遠くからクイナの鳴き声がする。あなたが来てくれたのかと思う。玄関の戸をたく幻の音に、何度あなたの面影が散ったことでしょうか。	◇掛詞「(水鶏が)たく×たく(柴の戸)」 ◇参照「水鶏のうちたたきたるは、誰が門さしてと、あはれにおぼゆ」(『源氏物語』『明石』)	
2008/9/17	五月、翡翠	翡翠の風まで青き後ろ手に色こきまぜて宿る月影	羽ばたき起こす風まで青くなるほどの翡翠の青い後ろ姿に、白い月影もまた、青くなりつつ宿っている。	◇参照「翡翠や露の青空映りそむ」(石田波郷)	
2008/9/18	六月、鶺鴒	闇かけて益荒男立つる篝火に鶺鴒の目ぞ映ゆる色のけはしさ	宵闇を指して鶺鴒の勇者が掲げのかがり火に、鶺鴒の鋭い眼光が陰しく映えることだ。	◇参照「やそとの男は鶺鴒川立ちけり」(『万葉』)	
2008/9/18	六月、虎鶺鴒	鶺鴒のうらなく夏の杜の夜は風もけうとき床の上かな	鶺鴒の鳴く夏の夜の鎮守の杜での一晚は、吹く風まで悲しく恐ろしい心地のする寝床の上である。	◇枕詞「鶺鴒の→うらなく」 ◇参照「鶺鴒のうら嘆けましつ」(『万葉』)	
2008/9/19	七月、鶺鴒	かささぎのまだ見ぬ橋に思ひかけてほしあひを待つ露の織姫	かささぎが架けるという橋はまだ空に現れない。橋を渡って彦星に会い、涙をぬぐい合う日を待ち遠しく思っ、涙を流す織姫。	◇掛詞「星逢ひ×干し合ひ」 ◇縁語「橋、かく」「かく、干す、露」 ◇参照「鶺鴒の橋」:中国の七夕伝	
2008/9/19	七月、鶺鴒	あはれなり沢の水音(みのと)の底うつり鶺鴒立つ秋の空の夕暮	鶺鴒が空に飛び立ってゆく姿が沢の底に映る、秋の夕暮れの情趣よ。	◇参照「心なき身にもあはれは知られけり鶺鴒立つ沢の秋の夕暮れ」	
2008/9/20	八月、鶺鴒	おきまよふ黄なる涙に身をつくし木々に袖振り鳴ける鶺鴒かな	おびたしい黄色の涙に身を尽くし、木々の上で羽ばたき鳴いている黄色い鶺鴒よ。おびたしい涙に身を尽くして袖を振る、別れ際の女よ。	◇参照「鶺鴒の影すぎしと思ふ霧深し」(秋桜子)	◆鶺鴒の涙も黄色と見たのは美しい幻想 ◆鶺鴒の鳴く時のさまを、小さな一身を尽くしていると見た ◆この鳥のか弱いような愛らしい風情がよく出ている(水垣久)
2008/9/20	八月、鶺鴒	草深き野辺の秋風はらひあへず露の底にぞ鶺鴒鳴くなる	草深き野原で、吹く秋風を払いきれない鶺鴒は、露に満ちた地面で鳴き、恋人に飽きられた女は、涙の底に沈む。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇参照「夕されば野辺の秋風身にしてみても鶺鴒なり深草の里」(俊成)	
2008/9/21	九月、雁	渡り来る声に重ねて待たれつる今日か明日かの雁の玉章(たまづさ)	雁が渡って来る鳴き声に、重ね重ね待たれてしまう。今日か明日か、すぐにでもあの人からの手紙が届くのではないかと。	◇参照「故郷に待ち見る人もたどるらしかすみてうすき雁の玉章」(『新続古今』)	
2008/9/21	九月、鶺鴒	たちかへり羽振きてたむ鶺鴒の波うつ声の色の花めき	季節は繰り返す。鶺鴒が羽ばたく季節も羽をたむ季節もあるように、今、目の前の鶺鴒の羽と鳴き声は波打ち、一時の華やかさを現出しているのだ。	◇参照 源義経の「鶺鴒越の逆落」	
2008/9/22	十月、鶺鴒	白妙の初雪降りてつもらぬによそにぞとけぬ鶺鴒の毛衣	現実には降っている白い初雪のように積もらない幻の雪であるのに、ほかでもなく、すでに降って解けてゆく雪のような、鶺鴒の白い羽毛よ。私の白い着物は、雪ではないのに、ほかでもないあなたに解かれ、鶺鴒の羽毛のようです。	◇枕詞「白妙の→雪」 ◇掛詞「(雪が)とけぬ×(毛衣が)とけぬ」 ◇縁語「白妙、解く、毛衣」「白妙、初雪、降る、積もる、解く」	
2008/9/22	十月、鷹	鷹狩りに大空さへもとほしろく契りし闇の帰るさの道	鷹狩りの帰り道、人間が闇を待って行うようになったこの殺生を思うと、大空の果てまで雄大に奥深く見える。	◇参照「久方の中なる川の鶺鴒舟いかに契りて闇を待つらむ」(定家)	

2008/9/23	十一月、千鳥	さとはやき足音あまたの浜千鳥真砂(まさご)の路に揺るぐ夕影	すばやい動きで小さな足音を沢山立てながら、砂浜の上に道を作って揺れ進む千鳥たちの、夕方の姿よ。	◇参照 「忘れむ時しのべとぞ浜千鳥行方も知らぬ跡をとどむる」(『古今』)	◆浜辺をすばやく、しかしちよつと頼りない足取りで歩く千鳥が、興味あるさま ◆「あおとあまたのはまちどり」は調子が良くて面白い ◆「夕影」を言ったのはこの鳥の持つ哀れな風情が出て、巧い ◆千鳥の足跡が砂浜に点々と付いているのを「路」と言いなした
2008/9/23	十一月、鴨	寒き夜の浮き寝の鴨の羽の色に散り敷く月の影の玉水	寒い夜に浮き寝する鴨の美しい色の羽の上に、宝石のような川の水が散り敷き、月影も散るように宿り敷く。つらい一人寝の女が流す涙の上に、月影が散るように宿り敷く。	◇掛詞 「浮き寝×憂き寝(音)」 ◇参照 「冬の夜の鴨の浮き寝」(『宇津保物語』) 「水鳥の鴨の羽色の」(『万葉』)	
2008/9/24	十二月、鳩	鳩鳥や河の葦辺におく霜を遠近(をちこち)はらふ冬の夕暮	鳩鳥が河原の葦に置いている霜をはらっている姿があちこちに見える、冬の夕暮れよ。	◇参照 「冬の池にすむ鳩鳥のつれもなく」(『古今』)	
2008/9/24	十二月、都鳥	あなたよりこほりも渡る都鳥海面(うみづら)長く続く夕影	夕方、遥か彼方より流水も渡ってくる中、都鳥も渡ってきた。海岸線に何羽もの都鳥が長い列をなしている光景よ。	◇参照 「名にし負はばいざこととはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと」(『古今』)	
2008/9/25	正月、残雪	うすくこく苦屋の先に残る雪若草とけし帰るさのあと	粗末な家の庭先の若草に、雪がまばらに残っている。女がやっと私に打ち解けたところで今帰りを惜しんできた、その庭に。	◇掛詞 「(雪が)とけ×(若草が//女が)とけ」 ◇参照 「うすくこき野辺の緑の若草にあとまで見ゆる雪のむら消え」(宮内卿)	
2008/9/25	正月、余寒	春来てても夜空は晴れぬ雪ながら梅が香寒き風のさむしろ	春が来てても、夜空は晴れず雪模様で、寒い吹雪が梅の香りを運んでくる寝床である。	◇参照 「ともすれば花にまがひて散る雪に梅が香寒き二月の空」(小)	
2008/9/25	正月、霞	わたりには先に霞をかけおきて我が身忘るる夜半の佐保姫	辺り一面に真っ先に霞をかけておいて、自らの体にかける「霞の衣」の分だけ残すのを忘れた夜の佐保姫。	◇参照 「霞の衣」:「春のきる霞の衣ぬきを薄み」(『古今』)	
2008/9/25	二月、春風	梅が香を四方(よも)に延(の)ばへてさそふ風咲く方分かず霞む春	春風が梅の香りをあまりに四方におしなべて吹くので、香りに誘われても、どこに梅が咲いているのか分からない、霞のかかる	◇参照 「花の香はかをるばかりを行方とて風よりつきやみの空」	
2008/9/25	二月、春雨	さらでだに春の山辺(やまべ)は臙にてそなたの空に雨ぞ重なる	ただでさえ春の山のほとりは臙に霞んでいるのに、その辺りの空に春雨までが重なり降る。	◇参照 「思ひあまりそなたの空をながむれば霞を分けて春雨ぞ降	
2008/9/25	二月、曙	夜をこめて花は袂をよそふとも枕より見る春のあけぼの	夜が深いうちに桜は華やかさを整え、私もあなたに会いに行く化粧と装いを整えたけれど、春の暖かな心地よさに、枕の上でうとうとしながら、朝を迎えてしまった。	◇参照 「風かよふ寝ざめの袖の花の香にかをる枕の春の夜の夢」(俊成女)	◆春曙の耽美的な気分がよく出ている(水垣久)
2008/9/25	三月、桜	落つる日になほ色映ゆる雪と見ゆ桜に霞む黄昏の空	散り落ちるその日にこそ、我が人生の黄昏時にこそ、落ちてゆく夕日の色にいつそう映えた雪と見えることだ。黄昏時の空を霞ませる桜は。	◇掛詞 「(桜が)落つる×(夕日が)落つる」 「日(日にち×夕日)」	
2008/9/25	三月、朧月	春の夜の月見る空の霞めるは桜の色か梅のにほひか	春の夜空に出た月が朧に霞んでいるのは、霞のせいか。桜の色が空に染みたせいか。梅の匂いが立ちこめたせいか。心打たれる我が涙のせいか。	◇対句 「桜の色か×梅のにほひか」 ◇参照 「大空は梅のにほひに霞み	
2008/9/25	三月、落花	面影は重ねじとてなほも惜し花の別れは袖のひとへに	桜の面影を心に重ねまい、あの人の面影を心に重ねまいと思っても、桜との別れ、恋人との別れは、夏の薄着に衣替える我が身にとつて、ひたすら惜しいことです。	◇掛詞 「一重に×偏に」 ◇対句 「重ね×ひとへに」	
2008/9/26	四月、余花	ひとときに咲き散るは身に余ると風薫るまで残る花々	一編に咲いて散る華やかさは身に過ぎるとして、夏の風が薫る頃までとところどころ散り残っている春の花々よ。	◇参照 「あなかしがまし花もひと時」(僧正遍照『古今』)	
2008/9/26	四月、新緑	風の色は緑ひとつにかはりつつほのかに残る花の移り香	風の色は夏の緑一色に変わりつつ、それでもほのかに風の中に残る花の移り香である。	◇参照 「蟬の羽の薄き衣になりぬとも心にとめよ花の移り香」(『文保	

2008/9/26	四月、夏木立	春の色の梢は消えし夏木立緑の花と見るひまもなし	春の花の色香が梢から消えた夏木立の姿。生い茂る緑の葉を花と見ようにも、そのようなゆとりもない緑一色である。	◇参照「春すでに暮れなんとす、夏木立にも成りにけり」(『平家物語』)		
2008/9/26	五月、五月雨	五月間来ぬ通ひ路に立ち出でて雨より受くる髪さみだれ	五月間の中、あの人が通って来てくれなくなった路に出て待つ私。五月雨から、そして、私自身の涙から授かった、我が髪の乱れよ。	◇掛詞「五月雨×さ乱れ」 ◇参照「行く先の道もおぼえぬ五月間」(『玉葉』)		
2008/9/26	五月、夏雲	忘れぬ憂き夏の夜の中空にうつろふよその雲の通ひ路	うわの空のつらい気分で見上げる夏の夜の天空に、雲が通い合う。あなたと心が通い合っていた春の頃が忘れられない。	◇掛詞「中空に(中天に×うわの空で)」		
2008/9/26	五月、夏海	大風に夏のわたつみ波立てていかづち遠くあふぐ浜松	大風が吹き、夏の海原では海神が大波を立てている。遠い沖の空では、雷神が雷を起こす。雷鳴を仰ぐかのようにそそり立つ、浜辺の松。	◇参照「わたつみの沖つ白波立ち来らし」(『万葉』)	◆夏の荒海を激しいタッチで描いた叙景歌 水平線の彼方に閃く雷光を人ならぬ浜松が仰いでいるとしたところが画竜点睛	
2008/9/26	六月、夏草	夏草や下葉の陰に風の入るかりそめだにも惜しき涼しさ	夏草の下葉の陰にほんの一瞬入り込む風の涼しさを見るだけでも、我が身のことかと勿体なく感じられるほどの、夏の暑さで涼しいものは何かないかと岩に尋ねてみるが、答えず、日光は岩の根元にまで盛んに照っている。それでも何とか、岩の根元のさらに底に、美しい玉のような清水の流れを見つけたので	◇参照「夏草のかりそめにとて来し宿も」(『新古今』)		
2008/9/26	六月、清水	涼しさをとへど岩根は日盛りにさりと底の水の白玉	涼しいものは何かないかと岩に尋ねてみるが、答えず、日光は岩の根元にまで盛んに照っている。それでも何とか、岩の根元のさらに底に、美しい玉のような清水の流れを見つけたので	◇掛詞「岩根×言はね」 ◇参照「暑き日盛りには、人々涼みなどし給ふ」(『宇津保物語』)		
2008/9/26	六月、夕立	遠近(をちこち)の木々をぬけ来る風青くにほひ涼しき夕立のあと	あちこちの木々を通り抜けて来る風が青々とした葉の色に湿り、涼しい匂いをたたえている夕立のあとである。	◇参照「遠の空に雲たちのほり今日しこそ夕立すべきけしきなりけれ」(中山家親)		
2008/9/27	七月、残暑	秋立つもしばしひとへの衣手にうち重ぬるは扇ぐ音の数	立秋を迎えたが、残暑のため、しばらくは薄着のままである。重ねるものは、上着ではなく、団扇で我が身をあおぐ数である。	◇対句「ひとへ×重ね」	◆夏衣と扇が、一と多という数の対照に(水垣久)	
2008/9/27	七月、秋風	待つ人に飽かぬ花野を眺むれどさても身に染む秋風の色	秋の花野を眺めながら、飽きもせずにあなたを待つけれど、それにしても、あなたの気持ちのほうは飽きていることを告げる秋風の不穏な色が、私の身に染み入るのです。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇参照「秋萩の花野のすすき」(『万葉』)		
2008/9/27	七月、夕暮	忘れぬ袖の別れの色の道下葉こがるる秋の夕暮	忘れられない。別れ際に袖に流した紅涙と同じ色の夕日が照る道。道沿いに生える草葉のように、秘かにあなたを思い続ける、秋の夕暮れ。	◇参照「下葉のこらず色づきにけり」(『古今』)		
2008/9/27	八月、星	いかにせむ雨夜の星のあやにくに明日とも見えぬつまの燈	どうしようもない。雨であいにく星々が見えない夜空の中、明日会える端が見つかるとも思えずもどかしい、我が妻織女星の光よ。	◇掛詞「妻×端」「燈×乏しび」 ◇「乏し妻」 ◇参照「八千戈の神の御代より乏し妻人知りにけり継ぎてし思へば」(『万葉』) 「こちと女夫は雨夜の星、どこにあるやらないやらで」(浄瑠璃『卯月の潤』)	◆明日へのぼんやりとした不安(水垣久)	
2008/9/27	八月、月	空見ても心に曇る月の影冴ゆる枕に秋を知るかな	月影が澄んでいるはずの秋の空を見上げても、涙に隠れ、心の曇りを映して、よく見えない月影。枕の涙にはっきりと映る月影を見て初めて、今が秋だと、あなたが私に飽きたと、知ったのでした。	◇掛詞「秋×飽き」 ◇参照「すみなれし昔の人としのぶまに心に曇る広沢の池」(『和歌所影供歌合』) 「憂き身にはながむるかひもなかりけり心にくもる秋の夜の月」(慈円)	◆中世風の内的な世界 ◆ゆかしい情趣と冴えた感覚を兼ね備えた、大変すぐれた歌(水垣久)	◆空見ても涙に曇る月の影冴ゆる枕に秋を知るかな(樂々)
2008/9/27	八月、野分	片敷きて夢見む先の袖返し野分の末の通ふ床かな	恋人を夢に見るために袖を返して一人寝る夜の床に、外で荒れている野分の端が吹きつけ通ってくることです。	◇参照『源氏物語』「野分」		
2008/9/27	九月、白露	秋風に木の間の月を待ちとりて光を千切る草の白露	木々の葉を揺らしてすき間を開け、月の光が通り抜けるようにしてくれる秋風を待っていた、地面の草葉の白露。やがて風が吹き、月の光がそれぞれの白露に、細かく千切られるように照つ	◇参照「木の間よりもりくる月の影見れば」(『古今』)		

2008/9/27	九月、霧	秋霧やいづれか愛しき吾妹(わぎも)なる汝(なれ)を漏り来る衣(ころも)打つ音(ね)の	もうすぐ着く我が里に出ている秋の霧よ。あなたの奥にある里から漏れ聞こえてくる、衣を砧で打つ音のうち、どれが我が愛しい妻のものであるか。	◇参照 「秋霧のたつ旅ごろもおきて見よ露ばかりなる形見なりとも」(大中臣能宣)	◆霧の聴覚的効果に着目された趣向は面白いしかし、大変難しい歌(水垣久)	◆里こむる霧を漏り来しからころも打つ音のいづれ愛(は)しき吾妹子(水垣久) ◆秋霧を漏り来る衣打つ音のいづれか愛しき妹がなるらん
2008/9/27	九月、紅葉	色々のまさる紅葉ぞ錦木と道の奥まで数をあらすふ	様々な色に濃くなってゆく陸奥地方の紅葉は、男が女の家の玄関先に立てている錦木と、山道の奥に至るまで、色んな場所で、木々の数を争っていることだ。	◇掛詞 「道の奥×陸奥」 ◇参照 陸奥地方の「錦木」「思ひかね今日立て初むる錦木の」(『詞花』)		
2008/9/28	十月、木枯	朝戸出の冬の下道先冴えて色なき果ての木枯しの風	冬の朝、玄関先の道は先のほうまで透明に冴え渡っている。果ての果てまで、木枯らしが吹き渡っている。	◇参照 「木がらしの風にも散らで人知れず憂き言の葉のつもる頃かな」 「色見えてうつろふものは世の中の」		
2008/9/28	十月、時雨	いつしかと月日流るる夕時雨ふる夜のなかの花の面影	早くも月日は流れ、夕時雨が降る季節となった。夜の夕時雨の中、春の花のような日々を共に過ごした貴女の面影が浮かぶ。	◇掛詞 「降る×古る(ラ上二)」 「夜の中×世の中」		
2008/9/28	十月、冬木立	月影をかたみに浴びて連ねたる梢さびしき冬木立かな	冬木立はそれぞれ、月影をその肩身に交互に浴びて、皆で連なっている。葉の落ちた梢が、寂しい限りである。	◇掛詞 「肩身に×互に」		
2008/9/28	十一月、枯葉	冬なれやたえて梢のかれがれになほさびしさは心かれなで	まことに冬らしさそのものであることです。すっかり木々の梢が枯れ果てた中、なお寂しさは枯れ果てない。あなたの訪れが枯れ果てた中、寂しさは心を離れない。	◇掛詞 「絶えて(すっかり×木々の葉やあなたの訪れが)」「梢×来ず」「枯れ枯れ×離れ離れ」「枯れなで×離れなで」		
2008/9/28	十一月、霜	さむしろやうつろふ色の袖の霜夜も知らぬ月の光に	寒い寝床の上の霜に時は流れ、流し疲れた私の袖の涙も色あせてゆく。一人で過ごしてきた何晩もの月の光に照らされながら。	◇参照 「さゆる夜もふけゆく袖の霜のうへにこほりかさぬる月の影かな」(『内裏九十番歌合』)		
2008/9/28	十一月、嵐	草も木も枯るる冬にぞとほしろき果ての雪まで過ぐる嵐は	果ての果てに降る雪にまで通り過ぎてゆく嵐は、草も木も枯れてしまうこの冬にこそ雄大に見えることだ。	◇参照 「吹きすぐる峰のあらしも心せよ真木のいたぶし今夜ばかりぞ」(小侍従)		
2008/9/28	十二月、氷	袖の上の氷の鏡くだくほど面影散れる冬のあけぼの	袖の上の氷を砕き、凍った我が涙を砕くたびに、春秋の花々の面影、あの人の面影が、その鏡のような破片にきらきらと映り散ってゆく、冬の明け方です。	◇参照 「さえし夜の氷は袖にまだとけで」(『更級日記』)		
2008/9/28	十二月、雪	色もなき心の空の果たてよりとはれぬ袖をすべる白雪	私の心を映すような、華やかな色もない冬の空の果てから、白雪がはらはらと降り、あの人に訪ねてもらえなくなった私の袖をすべり落ちる。	◇参照 「色即是空」「色はみな空しきものを龍田川もみぢ流るる秋もひととき」(定家)	◆雪の日に虚しく人を待つ心 ◆景を内面化 ◆どんよりとした雪空の果ては、心の奥深くまで覆う絶望に重なり、「袖をすべる白雪」は、期待にそむき擦れ違う恋人の心を暗示	
2008/9/28	十二月、冬山	冬の色を山の眺めに数ふればなべてひとつの雪のさびしさ	山々の風景を眺めながら、冬の色を数えてみると、辺り一面、雪の寂しさ一色であった。	◇参照 「ひととせを眺め尽くせる朝戸出に薄雪こぼるさびしさの果て」		
主催: 余情会	歌数:788首 歌人数:22名 (うち完詠4名) 自歌数:25首	『寄調度恋二十五首』(てうどによするこひにじふごしゆ)			評	派生歌など
2008/10/1 出題 2008/10/21 判	調度品に寄せて恋を詠むこととされた。 出題者:長満たき・武田あさゑ・袴ちの子 判者:長満たき・武田あさゑ・袴ちの子・衆議判					

2008/10/1	寄衣恋	衿の色袖のにほひも身をかれて霜の日数に朽ちし雛形	衿の色も、袖の匂いも、色香という色香は全て枯れ、私の体から去ってゆきました。冬の霜の日の数だけ、涙の数だけ、衣装雛形も朽ちました。	◇掛詞「枯れて×離れて」 ◇縁語「衿、袖、雛形」 ◇対句「衿の色//袖のにほひ」 ◇参照「衣装雛形」:江戸時代		
2008/10/1	寄帯恋	露霜の帯ぞ夢にもとけあへぬ契りむすばぬなかのかたみに	あなたが残した忘れ形見は、秋の露、冬の霜、私の涙。濡れた下帯が解けるなど、夢のまた夢。あなたとは逢瀬を約束しない仲の私。着物の内の肩身などお見せする機会もないことでしょう。	◇掛詞「夢にも(夜の夢にも×少しも)」「(露霜が×帯が)とけあへぬ」 「中×仲」「肩身に×形見に」 ◇縁語「露霜、とく、むすぶ」「帯、とく、むすぶ」		
2008/10/1	寄枕恋	いかにせん散らぬ契りを待ちながら音も枯れし夜の塵の枕を	どうすればよいのでしょうか。散らずに咲き続ける恋の成就を待ちながら、あの人の訪れが枯れ、私の涙も流し果てた夜に残る、塵のような枕を。	◇掛詞「(恋人が訪れる×私が泣く)音」「塵×散り」 ◇対句「散らぬ契り//塵(散り)の」		
2008/10/1	寄蕙恋	蕙織るこの手力(たちから)の恋も絶えしくものやなき袖の露かな	蕙を織るこの私は、失恋の傷心で手の力も弱り、蕙は出来上がらず、敷くものもありません。及ぶものがないのは、私の袖の涙です。	◇掛詞「敷く×及く」 ◇縁語「蕙、織る、敷く」 ◇本歌取「君がため手力疲れ織りたる衣ぞ」(『万葉』)		
2008/10/1	寄褥恋	梅が香のよその袂は春見えでなほも褥(しとね)の霜のむら消え	芳しい梅の香りと裏腹の私の袂には、春が来る気配もなく、今なお、あちこちに冬の霜が消えずに残るような褥に寝ておりません。それでもあの人に来てくれるのではないかと思つて畳の上に引っぱり出してきたものの、まだ着ずにたたんで置いてあるそれぞれの着物の上に、涙は落ち、畳の底にまで染みてしまいま	◇参照「簾のうちよりしとねさし出でたり」(『大和物語』)		
2008/10/6	寄畳恋	さりととも装ひを待つ衣ごとに畳の底も露は染みつつ	心は重く沈み、私はふさぎこむ。閉めきつた襖の奥にいる私のように、私の恋は閉じた。心を少しは慰めてくれる夜風の端っこが吹き漏れてくるすき間さえ、襖にはない。	◇掛詞「畳×(それぞれの着物ごとに)畳み」		
2008/10/6	寄襖恋	心重りふすまの奥に恋閉ぢて夜風の末の漏るひまもなし	あなたに会う日に着るために、以前から揃えてきた棚の着物。それらを着て後朝を迎える日は、いつやって来るのでしょうか。一人で朝を迎えた今、空には有明の月が出ています。	◇掛詞「襖×臥す」 ◇縁語「襖、閉づ、ひま」		
2008/10/6	寄棚恋	昔より揃へし棚の衣々もいつ見ることの有明の月	あなたを思うあまりに、私の顔や体がどうなっているかわらない、自分で分かります。赤くなってゆく肩身が映る鏡を見なくても。	◇掛詞「衣々×後朝」「(見ることが)有り×有明」		
2008/10/6	寄鏡恋	思ひ余る色はみづから知られけりかたみうつろふ鏡見ずとも	心の暗さに色が萎れた私の黒髪の間を、櫛はさまようように進んだ。そして、ほんの一瞬、音を立てて折れた。櫛の破片に、涙がこぼれた。	◇掛詞「移ろふ×映ろふ」		
2008/10/6	寄櫛恋	ぬばたまのしをれし色に迷ひつこぼるる櫛の玉響(たまゆら)の音がこぼれた。	私の黒髪からほど遠いところに咲く桜の梢に、風は通り過ぎ、花を散らす。私の髪には花びら一枚も乗ってこない。あの人とは一晩も一緒に過ごさない。ただ私の髪に差した簪に、花の絵が描かれているだけ。	◇枕詞「ぬばたまの一(髪)」 ◇掛詞「零るる×毳るる」		
2008/10/11	寄簪恋	黒髪よその梢に風過ぎて一弁(ひとよ)も添はぬ簪の花	あなたが手で掻き分けるのは、現実の私の髪ではない。あなたは目の前にいない。ただ花の模様が描かれた筈ばかりが、私の髪を掻き分ける。むなしい髪の上に、むなしい空が広がる。一人寝る寝床に、朝日が映る。あなたを待ちながら夜中に塗って、泣きながら寝床に押しつけた口紅が、朝日に映え、やがて色あせてゆく。花のようだったあの人との昔の日々はあせて、今は明け方の空の紅色が身に染みる。	◇掛詞「一弁×一夜」		
2008/10/11	寄筭恋	かきやるはただ筭(かうがい)の花の彩あやなき髪玉響の空	扇で我が身をあおぐうち、暑さと共に、あなたの移り香も、空に飛んで行って、どこかの桜の木の梢も通り過ぎて、なくなり果てました。私の心は、幻の反魂香の中にあなたを見るばかりのわ	◇序詞「かきやるは～彩→あやなき」		
2008/10/11	寄紅恋	ひとりぬる床にうつろふ花の紅(べに)今は昔のあけぼのの色	◇掛詞「寝る×塗る」「移ろふ×映ろふ」			
2008/10/11	寄香恋	移り香は扇の空に消え果てて過ぎし梢も侘びしさのあと	◇本歌取「移り香の身にしむばかり契るとて扇の風の行方たづねむ」(定家)			
2008/10/11	寄玉恋	にほはしき玉とぞ人は思はじな身ながらいとふ床の涙を	美しい宝石のようだと、あの方は思わないでしょうね。自分でも、どれもこれもいやなものだと思う、寝床の私の涙の一つ一つを。	◇掛詞「身ながら×皆がら」 ◇参照「憂き身をば我だにいとふいとへただそをだに同じ心と思はん」(俊成)		

2008/10/16	寄糸恋	契りおかぬ袖は底まではつれけり 人香も知らぬ白糸の末	あなたと契りを結ぶことのない袖は、ほつれる限りほつれ尽くしました。あなたの移り香も知らない白糸の、端の端まで。	◇参照 「あげまきに長き契りを結びこめおなじ所によりもあはなん」(『源氏物語』「総角」)		◆身は果てぬ糸の 乱れの苦しさに後の 世に見む滝の白糸 (光源氏、唱和、安倍 貞任の歌を踏ま
2008/10/16	寄墨恋	あはれ文は今日を限りの露の底 夢のなかにも墨はなければ	ああ、今日を最後に、あの人への艶文は涙の底に沈みました。夢の中にさえ、続きを綴るだけの墨はなく、あなたとの結婚生活もないのですから。	◇掛詞 「墨×住み」		
2008/10/16	寄筆恋	手末(たなすゑ)は忍び忍ばずうち 揺れて露ひとしほの水茎(みづぐ ぎ)のあと	艶文を綴る私の手先は、耐えようにも耐えきれずに震えて、その拍子に落ちた涙の一滴が、ひとしお暑い思いで綴った文字ににじむ。	◇掛詞 「一入(初入×ひときわ)」 ◇参照 「水茎の書きも尽くさぬ思ひをば」(『為忠集』) 「我ならで誰かあはれと水茎も」(『右京大夫集』)		
2008/10/16	寄硯恋	逢ふことは硯のかたき闇の色思 ふ心を磨るとばかりに	あの人に会うことは、硯の硬さのように、実現しがたいこと。硯の黒さのように、先の見えない闇の中のこと。あの人を思うあまり、心を磨り減らすばかりです。	◇掛詞 「硬き×難き」 ◇縁語 「硯、磨る」		
2008/10/16	寄紙恋	はかなしひとりかきやる手末(た なすゑ)は重ねてかかる紙遣ひし て	はかないことなのでしょうね。独りで手先を必死に動かして恋文を書き、何度も書き損じては、こんなに紙を無駄遣いして。独りで髪を何度も掻き上げてみては、あなたにそうされるような真似をして。	◇掛詞 「書き遣る×掻き遣る」「重ねて(何度も×紙を重ねて)」「かかる(こんな×髪が掛かる)」「紙×髪」 ◇縁語 「書き遣る、重ね、紙」「掻き遣る、掛かる、髪」		
2008/10/21	寄箸恋	かけあへぬ頼みの恋も身も細りさ らに通はぬ夜半の箸々(はしばし)	あなたとは恋の成就の期待をかけ合えない仲。恋の成就も私の身も、やせ細りました。あなたと一緒に過ごして、仲良く食事をして、お互いの心に橋を架けるように、お互いのお箸どうしをお皿に通わせるようなことは、決してないのです。	◇掛詞 「掛け×架け」「皿に×更に」 「箸々×橋々」 ◇縁語 「皿、箸」「架く、橋」		
2008/10/21	寄皿恋	一皿(ひとさら)の恋の割れてや散 りし水みづから掬(むす)ぶ頼みだ になし	一枚の皿のように恋は割れて、水が飛び散った。私には、それを両手ですくい上げる力もない。もう私の力だけでは、あなたと結ばれる期待もできない。	◇序詞 「一皿の～水～みづから」 ◇掛詞 「掬ぶ×結ぶ」「手飲み×頼み」 ◇縁語 「皿、割れ」「散り、水、掬ぶ、手飲み」		
2008/10/21	寄桶恋	桶のうちにかたみの涙うち巡り湯 浴みのほかに紛ふひまなし	桶で体にかける湯のうちに、失恋の形見に流す涙が混じり、体を打ちのめし、巡り巡る。毎晩の湯浴みのほかに、涙を紛らせ	◇掛詞 「肩身×形見」		
2008/10/21	寄盥恋	衣籠(きぬご)めに心の瑕(きず) を流さんんのちも頼まぬ恋の盥 (たらひ)に	衣服と一緒に、心の傷と一緒に盥の中で洗濯してしまいたいことです。これからもあの人との間に期待できない、満たされた恋に。	◇掛詞 「盥×足らひ」		
2008/10/21	寄傘恋	夢にだに渡らんと思ふ橋姫の傘も あへなき袖の下陰	まるで私は、夢にだけでも橋を渡ってあなたに会いに行こうとする橋姫です。橋を渡る中、傘を差してもどうしようもありません。傘の陰に隠れた我が身より袖に向かって流れ落ちる涙ですか	◇参照 「夢路まで思ひや絶えしさむしろの月も霜夜の宇治の橋姫」(肖柏『春夢草』)		
主催: 余情会	歌数:63首 歌人数:7名 自歌数:9首	『和漢朗詠集 恋』(わかんらうえいしふ こひ)				
2008/11/5	即詠	『和漢朗詠集』(1018)の恋の漢詩の和歌訳を競うこととした。 藤原公任撰 出題者:岩崎純一 判者:岩崎純一			評・朝鮮語訳	派生歌など
2008/11/5	爲君薫衣裳 君聞蘭麝不馨香 爲君事容飭 君見金翠無顔色 大行路借夫婦以 諷君臣之不終也 白居易	今はただ作りて薫(た)けど来ぬ人 の心のよその化粧(けはひ)袖の 香	今はもう、化粧をこしらえ、袖に香りを薫き染めても、来ないあの人 の心の外にあるものにすぎないのです。	◇対句 「作る、化粧//薫く、袖の香」	지금은 이제, 화장을 해도, 소매에 향기를 퍼워도, 그는 오지 않는 것이예요.	

2008/11/5	更闌夜靜 長門閉而不開 月冷風秋 團扇查而共絕 遊仙窟文 張文成	ひとりぬる秋の扇に風更けて月影 寒く門(かど)に照りつつ	あなたに飽きられ、一人寝をする秋の夜。用がなくなった夏の扇に、すっかり更けた夜の風が吹き、あなたの来ない玄関先の門に、月影が寒く照っている。	◇掛詞「秋×飽き」	혼자서 자고 있는 여자. 가을의 부채와 같은 몸에 바람은 불고 있다. 추운 달빛이 비치고 있는 문도, 깊게 닫히면서	
2008/11/5	行宮見月傷心色 夜雨聞猿斷腸聲 長恨歌 白居易	眉の月黒髪如雨また見えぬ身を 面影は傷(いた)め断つとて	愛する女の眉のような月が出、黒髪のような雨が降るのが、また見えてしまった。女の面影は、私を傷つけ、断腸の思いにさせることだ。	◇対句「眉の月、傷め//黒髪 の雨、断つ」	또 올랐다. 눈썹과 같은 달. 또 내려왔다. 후발과 같은 비. 나의 마음을 무너뜨려 버리는. 여자와의 추억이	
2008/11/5	春風桃李花開日 秋露梧桐葉落時 長恨歌 白居易	花の咲き葉の散るごとの面影や 重なる憂さに春秋もなし	花が咲き、葉が散るごとに、そこに女の面影を見る。四季に関係なく、いつでもつらさは重なることだ。	◇対句「花の咲き、春//葉の散 る、秋」	꽃이 피도록 아름다운 여자였다. 잎이 지도록 멀어진 여자였다. 괴로운 마음에 봄이나 가을도 관계가 없는 것 등 누가 알고 있었을 것인가.	
2008/11/5	夕殿螢飛思惘然 秋燈挑盡未能眠 長恨歌 白居易	夕されば螢の影に思ひ出でてまし て起き居る秋の燭(ともしび)	夕方になると、螢の姿に重ねて思い出される女の面影。秋の灯火が尽きても、なお寝られずに起きたまま、女を思い起こす。	◇参照「暮ると明くと胸のあたりも 燃え尽きぬ夕べの螢夜半のともし 火」(定家)	저녁이 되면, 반짝반짝 반디가 난다. 괴롭지만, 너를 생각해 낸다. 괴롭지만, 잠잘 수 없다. 밤이 되어도, 반짝반짝 빛나는 등화 주에	
2008/11/5	南翔北嚮 難付寒温於秋雁 東出西流 亦寄瞻望於緊月 九條右丞相報吳 越王之書 大江朝綱	眺めやるそなたの空によしもなし 遠き雁が音有明の色	眺める先の空は、長く続く雨模様。どうすれば、あの人にこちらを向いてもらえるだろう。北と南を行き来する雁に手紙を託そうにも、姿は見えず、東から西へと渡りゆく月を眺めるほかありません。	◇参照「思ひあまりそなたの空を ながむれば霞を分けて春雨ぞ降る」 (俊成)	기러기씨. 그에게 편지를 맡겨도 좋습니까. 달씨. 그와 함께 보고 싶습니다. 그러나, 이제, 그것도 할 수 없다.	
2008/11/5	聞得園中花養艷 請君許折一枝春 戀紀 齊名	選ばせよ弁々(よよ)芳(かぐは)し き一枝(ひとえだ)を奥の奥なる春 の花園	私に選ばせて下さい、一枚一枚の花弁が芳しい一本の草花を。奥深く隠れたところにある貴女の花園に、今から参りますから。今後、素晴らしい一夜一夜を過ごすお相手として、貴女を選ばせて下さい。	◇参照「白侍郎来りて一枝を折る」 (『白氏文集』「晚桃花」)	허락해 주겠습니까. 그 화원에 들어가고, 꽃을 한 송이 받는 것을.	
2008/11/5	寒閨獨臥無夫智 不効蕭郎枉馬蹄 和江侍郎來書 采女	渡り来し傍(そば)の足(あ)の音 (と)を聞きながら知らずはあらし 宇治の橋姫	男が渡って来る足音をすぐそばで聞いておきながら、それを知らないということはないでしょう。宇治の橋姫さんよ。	◇参照「さむしろに衣かたしき今宵 もや我を待つらん宇治の橋姫」(『古 今』)	나는 외로운 신상. 나를 위해서 와 준 당신의 발소리. 들려 기뻐.	
2008/11/5	貞女峽空唯月色 竊娘堤舊獨波聲 和源材子鰥居作 源爲憲	貝籠(ご)めに包みし文を形見とて 訪(と)ひし浜びの玉響の砂	昔美しい貴女からもらった、貝殻入りの恋文を形見として携えて、貴女がほんの少しの間に砂に化けてしまった浜辺を訪れたことだ。	◇参照「貞女峽」(『始興記』) 「竊娘堤」(『白氏文集』「天津橋」)	조개가 붙어 있는 편지. 그것만이 기유품다. 해변을 방문했어. 너가 조개를 주운 해변을.	
主催: 余情会	歌数:60首 歌人数:5名 自歌数:12首	『雪月花十二首』(せつげつくかじふにしゆ)				誕生歌かど

2008/11/9 出題 2008/11/10 判	雪月花を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 判者:岩崎純一				
2008/11/9 曉庭初雪	あかつきの風はもゆらに耀(かがよ)ひて白き玉散る庭の初雪	まだ未明に近い薄暗い暁の庭に吹く風に、白い玉のような初雪がゆらゆらと輝き、触れ合っかすかに音を立てているようだ。	◇参照 「御頸珠の玉の緒もゆらに取りゆらかして」(『古事記』)		
2008/11/9 草露映月	草の上につらぬきとめぬ白玉や緑に落(あ)ゆる露の月影	草の上に、緒に貫き留めていない玉のような露が溢れている。露に照る月影は、草の緑色ににじみ込んでいる。	◇参照 「白露に風の吹きしく秋の野はつらぬきとめぬ玉ぞ散りける」(文屋朝康)		
2008/11/9 雨中夕花	細き音(ね)も聞こえぬ雨の夕暮に霞を染めてにほふ花笠	音が聞こえないほどに細い小糠雨が降り、霞と区別のつかないような淡い夕暮れ。時空に梅の花の匂いが染み広がっている。	◇参照 『伊勢物語』「梅の花笠」 「村雨に覚めてぞ匂ふ夢人も着せて帰さぬ梅の花笠」(正徹) 「疑ひの雲なき空や如月のその夕影に折りつる袖も紅匂ふ梅の花笠」(詩:不詳 曲:峰崎勾当)		
2008/11/10 行路深雪	雪おもる道のゆくてを砕くとも白き果たてに空は閉ぢつつ	雪が重々しく降り積もる道を、霜や氷を砕くようなつもりで心を砕きながらかき分け進んでも、真っ白な行く手の果てに空は曇り閉じたままで、大雪は降り続きそうである。	◇参照 「待つ人の麓の道はたえぬらん軒端の杉に雪おもるなり」(定家)		
2008/11/10 連夜見月	眺めずはあはれになびく袖なきを幾夜の露ににほふ月影	物思いに沈まなかったら、自然の情趣というものに心惹かれることはないだろうに、私の袖は幾夜の露と涙に濡れ、月影を映し匂わせてきたのだろう。	◇参照 「秋風になびく浅茅の末ごとにおく白露のあはれ世の中」(蟬丸『新古今』)		
2008/11/10 暮春惜花	こきまぜし春のにほひを脱ぎそめてひとへに惜しな花の袂は	色々な花の魅力的な匂いを混ぜ合わせてきた春も終わりが近づき、人の装いも一重に衣替える夏を迎えるにあたり、花々の姿、花のような春の袂が惜しい。	◇参照 「見渡せば柳桜をこきまぜて」(素性法師『古今』)		
2008/11/10 湖上雪	うちはらふ袂のほかは色冷えてひとつににほふ雪の湖	湖面もその周辺も、白く冷え冷えとした一面の銀世界。白き色を消し去れるのは、我が手で雪を払いのけられる袂だけ。	◇参照 「駒とめて袖うちはらふ影もなし佐野のわたりの雪の夕暮れ」		
2008/11/10 江上月	空あふぐ巖(いはほ)の色をかすめつつ入江の底を磨く月影	空を仰ぎ見るようにそびえる巨岩の暗黒の色を少しかすめて明るくしつつ、入江の底を磨くように照らしている月影。	◇参照 「思ふどち見まほしき入江の月影にも」 「巖に生ひたる松の根ざしも」(『源氏物語』「明石」)		
2008/11/10 河上花	岸かをるこなたかなたの梢より河面(かはも)に花はうつりかひつつ	こちらとあちらの両岸で香っている春の桜や夏の山吹の花が、梢を離れ、河面にまで散り乱れ、映っている。	◇掛詞 「移り×映り」 ◇参照 「おのづからあはれとも見よ春深み散り残る岸の山吹の花」 「散り残る岸の山吹春深みこの一枝をあはれといはなむ」(実朝)		
2008/11/9 寄雪恋	あはれ冬はみそかにあけし窓のうちによべの枕をしたふ白雪	ああ、冬。もうすぐ大晦日の夜が明ける。昨夜から、あの人に来てくれないかとこっそり開けてみている窓。私の枕を慕うのは、あの人ではなく、降り込んでくる白雪。	◇掛詞 「密か×晦日」「開け×明け」 ◇参照 「扇・畳紙など、昨夜枕上に」		
2008/11/9 寄月恋	白露に待つ夜のなかの月過ぎて氷にうつる遠き色人	秋の白露に映っていた月影も、中秋を過ぎ、今は氷に映る冬となりました。あなたを待つ中、月日は過ぎて、月のように遠い存在のあなたです。	◇掛詞 「待つ夜×世の中×中の月」「映る×移る」		
2008/11/9 寄花恋	わが恋は春の梢の霞みつつ散りても花の風の山越え	私の恋は、桜の花咲く梢のあたりのように大げさに霞んでいて、散れば散ったで、花びらが風に乗って山越えをするような情熱なのです。	◇参照 「あらしふく花の梢にあとみえて春はずきゆく志賀の山越え」(家隆『新後撰』)		
主催: 余情会	歌数:15首 歌人数:5名 自歌数:3首	『東十条花紅葉歌』(ひがしじふでうはなもみぢうた)			
2008/12/7 即詠	花紅葉を詠むこととした。 出題者:岩崎純一 判者:岩崎純一			評	派生歌など
2008/12/7 花紅葉	花の袖紅葉の袂うつろひて涙のほかは染む色ぞなき	桜をあしらった袖。紅葉を描いた袂。花か紅葉のような、あの人との思い出。全てが移ろって、涙の色のほかは、赤く染まる花も紅葉もありません。	◇対句 「花の袖//紅葉の袂」		

2008/12/7	花紅葉	雪の色に時ふりし夜の面影よ紅葉のけはひ花のよそほひ	時が経ち、貴女との夜も古ぼけて絶えた今、降る雪の白い色を見ていると、面影が宿る気がする。秋の紅葉。春の桜。紅葉のような化粧。桜のような着物の装い。	◇掛詞「降り×古り」「気配×化粧」「よそほひ(様子×服装)」 ◇対句「紅葉のけはひ//花のよそほひ」		
2008/12/7	花紅葉	立ち返る花も紅葉もなかりせばかへりて雪は色なからまし	年ごとに滅びては現れる桜や紅葉がなければ、かえって雪の白き色気はなかったであろう。世が白一色のものであったなら、女の雪肌は色気を失うであろう。	◇本歌取「見渡せば花も紅葉もなかりけり」(定家) ◇参照『南方録』(南坊宗啓)		
主催: 余情会	歌数:15首 歌人数:5名 自歌数:3首	『祇園花見小路憂愁三首』(ぎをんはなみこうちいうしうさんしゆ)			評	派生歌など
2008/12/8	即詠	京都祇園は花見小路に寄せて憂愁を詠むこととされた。 出題者:長満たき・武田あさゑ 判者:長満たき・武田あさゑ				
2008/12/8	憂愁	行く夏よあはれは残せ常永久(とことほ)にやまとのにほひ撫子の	去りゆく夏よ。ものの情趣というものを永久に残して去り給えよ。大和撫子の花のような、日本の風情、日本の女の色香を。	◇対句「やまとのにほひ//撫子の色」(「やまとなでしこ」の分離)		
2008/12/8	憂愁	敷島は街も女も破(や)れ果てて粹(いき)やいつこに逢はむとぞ思ふ	祇園のみならず、この敷島の国日本では、街の佇まいも女の立ち居振る舞いも失われて、花柳界の機微と男女の情趣にどこで会えるのかと思う。	◇参照『「いき」の構造』九鬼周造『守貞謾稿』:「いき」と「粋(すい)」		
2008/12/8	憂愁	今はただ月花ばかりうつつかな祇園黒髪面影の色	今はただ、秋の月と春の桜ばかりが現実の美であることだ。祇園で出会った黒髪の舞妓たち、女たちは、どこかに去って、その色香は面影の世界となった。	◇参照『黒髪』近松秋江		
主催: 水垣久	歌数:723首 歌人数:26名 (うち完詠3名) 自歌数:100首	『花筵百首題』(はなむしろひやくしゆだい)			評	派生歌など
2008/6/16 出題 2010/12/23 結題	『堀河百首(堀河院御時百首和歌)』(1105~1106)にならい四季・恋・雑の百題の歌を詠むこととされた。 原主催・出題者:堀河天皇 出題者:水垣久 判者:水垣久・ネット衆議・星投票					
	◆特設ページ	左記の特設ページ(やまとうた内)に全歌掲載。				